



北播磨総合医療センター

がん診療、チームで挑む

がん患者一人一人の治療方針を医師らで検討するカンサードの様子。

生涯でがんになる確率・亡くなる確率

男性	女性
65% (2人に1人)	50.2% (2人に1人)
26.7% (4人に1人)	17.8% (6人に1人)

出典：国立がん研究センター「最新がん統計」・がんになる確率は2018年、がんで亡くなる確率は2019年データに基づく

あらゆる病気の中で最も死亡率の高い「がん」。日本人のうち2人に1人が一生のうちに何らかのがんにかかると言われており、すべての人にとって身近な病気です。

今回の特集では、県指定がん診療拠点病院である北播磨総合医療センターが進めるチーム医療や、がんに関して新たに開設されたセンター機能について紹介します。

がん総合診療センター

院内連携をより強くするため「がん総合診療センター」を設立

チーム医療とは、専門分野の異なるさまざまな医療従事者が一丸となって、一人の患者さんの治療にあたる取組のことです。病院の総力戦となるがん治療では、医療従事者一人一人が気づいたどんな些細なことでも、遠慮せず、互いに意見できる横のつながりが重要となります。

当センターの特徴は、診療科間の垣根が低く風通しが良いところです。その強みをさらに強化するため、今年4月に「がん総合診療センター」を設立しました。

患者さん一人一人に合ったきめ細かい医療を提供

がん治療には、外科手術、薬物療法、放射線治療の3つの治療方法があります。

当センターでは、がんの種類によって適切な治療方法を選択し、

がん総合診療センター センター長 副院長兼外科・消化器外科総括部長 黒田 大介 先生

【読者の皆さんへ】

コロナ禍での受診控えによって、がんのステージが進行した状態で発見される患者さんが増えています。受ける予定だった健診がなくなった方などは、ぜひ健診受診を検討してください。

それらを組み合わせることで最大の治療効果を得る集学的治療を行っています。治療方針については、医師や看護師、薬剤師といった医療従事者が緊密な情報共有を行う「カンサード」を実施し、患者さんにとって一番最適な治療を検討します。

患者と医療人を魅きつけるマグネットホスピタル

北播磨総合医療センター

西村善博 新病院長が就任

問 北播磨総合医療センター
080-8800

令和3年10月1日付けで北播磨総合医療センターの病院長に就任いたしました西村善博でございます。どうぞよろしくお願いたします。

病院であるとの認識が変わりました。このような素晴らしい病院の病院長職を拝命できたことを誇りに思います。

北播磨総合医療センターの第一印象は、緑に囲まれた自然豊かな病院というものでした。しかし、この病院を知るにつれ、その診療機能は、34の診療科をはじめ、医師を含む医療従事者の数と質、最新医療機器の設備など、どれをとっても優れた急性期病院であり、環境を含め、病を診るにはこれ以上ないほどの条件がそろった

また、コロナ禍において住民の皆さまの不安を少しでも取り除けるよう、安心して治療や看護を受けられる医療機能を維持するという重責に身の引き締まる思いであります。同時に、これまでの経験を活かして、がん診療についても重点的に力を入れていく所存です。もとより微力ではありますが、精一杯尽力致しますので、よろしくお願いたします。

西村 善博 病院長

【学歴】

- ・昭和58年3月31日
神戸大学医学部卒業
- ・平成2年3月31日
神戸大学大学院医学系研究科修了

【職歴】

- ・平成25年7月1日
神戸大学医学部附属病院呼吸器内科特命教授
- ・平成26年2月1日
神戸大学医学部附属病院副病院長
- ・平成30年2月1日
神戸大学医学部附属病院呼吸器内科教授

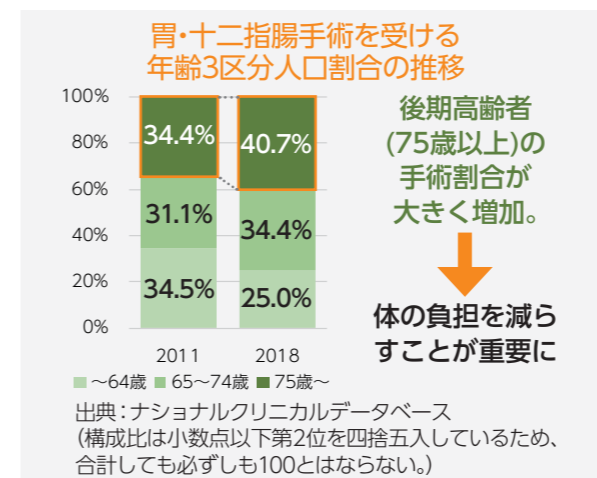
【趣味】 将棋

【座右の銘】 上善如水



先端医療センター
(低侵襲手術部門)
今後さらにニーズ高まる
体への負担が少ない手術

体の健康を乱す可能性のある外部からの刺激を医学用語で「侵襲」と言います。手術であれば体にメスを入れることなどを指し、この侵襲の度合いをできるだけ小さくする手術のことを「低侵襲手術」と言います。がんは年齢を重ねれば重なるほど発病率が高くなるため、高齢化が進む



む現代社会において、体への負担が少ない低侵襲治療の需要は今後さらに高まると考えられます。
適切な治療法で安全性を高め、健康寿命の延伸につなげる
低侵襲手術は、早期回復と入院期間の短縮、在院死亡率の低下などといったメリットがあり、健康寿命を伸ばすことができると考えられています。当センターでは、患者さんが最適な治療を選択できるように、主治医などとの連携を密にし、より安心できる医療を提供します。

先端医療センター
(低侵襲手術部門)センター長・
ロボット支援手術プロクター
(手術指導医)
中村 哲 先生



口腔機能管理センター

実は密接な関わりがある
がん治療と口の健康

全身麻酔手術や化学療法、放射線治療などの治療中は、免疫力が低下するため、健康時にはかかりにくい粘膜炎(口内炎)や感染症などの合併症が発生しやすくなります。そのため、口を清潔に保つことは、がん治療のあらゆる段階で重要となります。当センターでは、治療前から適切な口腔ケアを実施することで、がんの治療経過の中で、口腔内の有害事象を軽減させ、予定された治療を完了できるように支援しています。

口腔ケアはがんを乗り越える
大きな鍵の一つ

長期におよぶがん治療において、粘膜炎などの症状がひどくなると、「食べる」ことが患者さんにとって大変な作業となります。口でしっかりと食糧を乗り越えるために重要な役割があります。是非、日ごろから歯科を



受診し、口の定期ケアを受けるようにしましょう。



口腔機能管理センター
副センター長
二星 明奈 歯科衛生士

がんによる苦痛を和らげる 緩和ケア

がんにかかっている患者さんやその家族は、心や体の苦しみや辛さなど、さまざまな問題に直面します。「緩和ケア」とは、そのような苦痛や不安を和らげ、その人らしい時間を過ごせるよう支援することを言います。緩和ケアを「がんの治療ができなくなった方への医療」という認識を持たれている方は多いかもしれませんが、しかし、緩和ケアはがん治療の初期段階から継続して行うことで本来の効果を発揮します。



患者さんに合わせた切れ目のないケアを
体のつらさを和らげるためには、痛み止めや医療用麻薬を、患者さんの状態に合わせて調整します。心や精神的なつらさに対しては、患者さんの気持ちにスタッフ一同で寄り添い、生活上のさまざまな悩みを受け止めます。緩和ケアの相談は治療のどの段階でも可能です。相談を希望される方は問い合わせください。



▲緩和ケアでは医師や看護師、薬剤師、管理栄養士、公認心理士などの多職種で構成された緩和ケアチームが、患者さんの状態などを小まめに情報共有し、最適な支援に努めています。

内科診療部長兼呼吸器内科部長兼呼吸器センター長
高月 清宣 先生



外来化学療法センター

抗がん剤治療は
外来通院で受けられる時代に

がんの薬物療法(化学療法)は、かつては入院で行われることが一般的でした。しかし、吐き気止めや副作用を軽減する治療法の進歩により、現在、その多くが外来*で行われるようになりました。生活を大きく変えることなく化学療法を受けられることは、患者さんの体力面・精神面ともにメリットがあると考え、当センターにおいても、外来化学療法セ



北播磨総合医療センターなら
薬剤師常駐でさらに安心

抗がん剤治療には副作用のコントロールが重要となります。当院の外来化学療法センターには、薬剤師が常駐しており、看護師と情報共有を図りながら、その日の患者さんの状態に合わせた薬の調整を行うなど、より安心して治療を受けられる環境を作っています。

外来化学療法センター
薬剤室副室長
高橋 雅子 薬剤師

